第5回施設見学会に参加して ①

長岡ヘルスケアセンター

地域で生活できることを基本にした取り組み

大 谷　　強

安らぐ 気持ち を 生み出す 家具と 配色

おちつく色合いの茶色で統一された椅子とテーブルがある喫茶室で、キノコ風味のゼリーのデザートとコーヒーで見学疲れをくつろぐ。法的には「通所授産施設」であるカメリアと「地域生活支援センター」と呼ばれるアンサンブル。

通所授産施設は、実は、パンとお菓子を製造する工場でもある。１階で製造・販売し、２階でゆったりと、長岡京の山々や豊臣秀吉と明智光秀が雌雄を決した天王山を眺めながら、食べることができる喫茶室。私も１階のパン屋さんの売り場でパンをいくつか買った。

病棟も、木材を多く使った床と壁が暖かい。案内役でもある今堀さんが言われるとおり、採光にも配慮してある。明るい病棟である。かつて他の病院を訪れたときは、薄暗かったことを思い出した。最近の病院はこれが普通なのだろうか？　私の偏見だろうが、まして精神科病棟である。装いも一変している。

かつては、一直線の廊下の両側に病室が並んでいた。今回、案内していただいた病棟では、廊下の一角にソファーがあるコーナー。そこにＴＶが設置。自分たち数人の好みの番組をみてらした患者さんたち。階によってことなるロゴマークもついている。色合いもそれぞれ違う。

地域重視の
長岡ヘルスケアセンターを 見学

京都地方自治総合研究所の企画で、2005年９月26日に「2005年度第１回施設見学会」が開催された。京都市から旧西国街道を南西に向う。実際はＪＲか阪急電鉄で大阪方面の電車に乗るのだが。菅原道真を祭った長岡天神を横目でながめ、春先のタケノコ料理を楽しみにしつつ、京都府長岡京市にある「財団法人　長岡記念財団　長岡ヘルスケアセンター」に、私も参加し

た。

この病院は病床数454床をもつ精神科病院と、老人保健施設を併設している。その他、精神障害者生活訓練施設援護寮や通所授産施設、地域生活支援センターなど、精神科患者さんたちを支える事業を運営している。また、介護サービスを軸とした地域との関係では、長岡京市在宅介護支援センター、居宅介護支援事業所、訪問看護ステーション、訪問介護ステーションなども運営している。また、隣の自治体に特別養護老人ホームも建設中という。

見学者に挨拶された児島院長や精神医療の新しい動きについて講義をしていただいた才村医師の話によると、この病院では、患者さんをできるかぎり地域社会に戻す試みを、重視しているそうだ。入院はあくまで一時的な対応で、基本は地域での生活というコンセプトを実現しようと努力されている。

ひとり一人の活性化や グループでの張り合いづくり

この病院グループでは、早くから社会復帰に力を注いでこられた。精神科デイケア施設は、1984年にオープンし、京都府で最初のグループに属する。建設時には、近隣の住民たちと、いまでいう施設コンフリクトも起こったそうである。デイケア（ここは夕方19時までのデイナイトケアも実施）で、病院を退院した後もリハビリテーションを行う場は、患者さんの身近なところでは、まだ実施数が少ない。

デイケアでは患者さんたちの生活リズムにおうじて、カラオケやゲームなどのんびりと過ごせるような準備があった。さらに、デイケア新聞社や書道、茶道、クラフトなど、いろいろなプログラムが準備されている。アキがこないような工夫がある。私は「シングルライフ」つまり、ひとり暮らしのちょっとしたノウハウ、智恵や工夫を身につけるプログラムが興味深かった。

入院患者さんのリハビリテーションも見学し、支援を行っているＯＴスタッフからも話をきいた。個人ＯＴとともに、軽スポーツや園芸、鑑賞など、いくつかのグループに分かれている。病棟デイルームにスタッフがでかけて、おもに活動性の維持や対人交流の促進などを行うとか、エネルギーの発散や精神活動の活性化などに役立つ支援もされている。

社会で活躍していた 一流のスタッフによる日常支援

地域で生活している人のさまざまな相談に応じる地域生活支援センターは、まだまだ京都府では数少ない。亀岡市からも通ってくる人もいるという。地元に気軽に相談できる場所があれば、ひとり一人はもっと地域に根ざした自分らしい暮らしができるのに、とも思った。

さきほどのパン・製菓製造を行っている通所授産施設張では、日常生活の張り合いや就労への意欲や能力を育て、就労を促進しようとされている。定員は20名となっているが、現在通っていている人は、16名という。就職先を見つけて、お辞めになった方も５名ほど、いらっしゃるそうだ。

病棟の入り口にあるレストランも、パンや菓子を作っている授産施設でも、京都でも有名なお店で専門的職業をされてこられたスタッフが、技術面で指導的な役割を果たしながら働いている。パンは生地から作るそうだ。授産施設での販売だけではなく、一般のお店でも販売している。労働能力や労働意欲に応じた工賃を払っているという。通所者たちの勤務時間は毎日９時からと決まっている。朝早くの作業が必要な場

合は、専従スタッフたちがあたるという。

一流のプロが働いているというから、経営面も気がかりだ。しかし、関係者によると、授産施設だけの収益を図る必要がないともいう。精神障害者たちの就労支援が目的であり、授産施設から就労するように後押ししている。パン製造の技術面の指導よりも、プロが社会人として通用する力量がある人材を育てているという自覚があるともいう。労働意欲を高めるとともに、毎日の生活リズムやマナーも身につける。接客の極意を普通に伝えているので、サービス業界で就職する人が多いそうだ。

長期入院から 地域社会に 戻る 支援

しかし、社会復帰に力を入れているとはいっても、まだまだ地域社会で生活する目的は実現していない。渡してもらったデータを見ると、５年以上の入院患者が440名中、274名と６割を超える。しかも20年以上の入院が118名もいらっしゃる。これが、地域を重視してこられた長岡ヘルスケアセンターの実態でもある。

現在なら、早期に入院していたとしても、長期に入院しなくても済むようになっていると才村医師は話された。実際に、入院患者さんをひとり一人調べてみると、この長岡で、約120名は退院可能という結果がでたそうだ。入院患者さんの内、約３割である。厚生労働省が提案している数値と合致する。

ではなぜ、地域に戻ることができないか？これだけ長期に入院していると、地域で暮らす術を忘れてしまうこともある。なんとか、地域で生活できるように、リハビリテーションなどを重点的に行ってきても、まだまだ、患者さんの不安は強い。しかも、家族の方々も高齢になり、あるいはすでに亡くなられている。地域で暮らすには、課題が多い。

地域社会の 理解を 促進する 必要性

それ以上に、強いのは、地域の人々の偏見や拒絶の視線が厳しい面もある。患者さんを支える社会資源という面でも、気軽に相談でき、いざというとき駆け込める安心の場が地域にほとんど存在していない。長岡京にある病院であるが、京都市内からの患者さんが、入院患者さん

と通院患者さんともに、多数を占めているそうだ。地元の病院の利用を避けなくてはならない現実があるのだろう。

病院が地域社会への取り組みを強化しようとしても、利用している患者さんの居住地とのズレが大きいと、効果はあがらない。同時に、地域の医師会や開業医さんの問題も、あるとも思う。内科の診療所に通っている患者さんのなかで、精神科に転院したほうが好ましい人もいらっしゃるだろう。しかし、どうも抱え込みすぎる傾向があるともいえる。患者も、そうしたアドバイスをいやがる傾向もあるだろう。さらに、家族にも偏見が強い。

病院スタッフやとくに通所授産施設、地域生活支援センターなどのスタッフも、地域社会のあり方を改革する働きかけが、重要になるだろう。地域の人々や行政や医療機関など、就労の場でもある企業など、社会資源にかかわる人たちの心を拓く働きかけが、大事だ。

患者さんの努力はもちろん、重要だ。しかし、人間関係を調整するときのストレスや社会的孤立、地域からの排除に、すでに十分に抗して苦労されてこられた人たちに、本人のエネルギーをこれ以上求めることが妥当だろうか？

となると、今の社会を作っている人々、つまり私たちが、どう受け止めるか、どう付き合うか、どう社会を作りかえるかが、より重要な課題である。とくに、競争に追いまくられ必要以上にギスギスしている今の企業社会や、地域・家庭でも孤立しがちな人間関係を、どう創りなおすか、大きな課題を抱えて施設を後にした。

最後に、ほっとしたのは、見学をしていた仲間が、明るかったよなぁ、別に大げさに考えなくてもええんや、と帰りがけに、ポツリと感想をもらしているのを聞いたときだ。それだけ、やはり、精神科病院や通所授産施設に実際に訪れ、あるいは患者さんや精神障害のある市民たちと直接に触れ合う機会が大切だと思った。

（おおたに　つとむ・関西学院大学教授）